ゆすら梅

青柳みすず

ちひろの夫洋（ひろし）に、会社の上司から「会社に在籍している内に家を建てたらどうか」との話が持ち上がったのは平成六年だった。定年退職まで七年あったが、子どものいない二人は、家を構えることなど念頭になかった。当時二人は、会社が管理職用に千葉県松戸市に建てたマンションに住んでいた。さらに、間もなくして先輩の夫人から、「下田さん、家を新築なさるんですってね」との電話を受け、夫婦とも仰天した。

「管理職社宅にいつまでも居座るなって事なんだね」と洋は言った。

それ以来、週末には二人で家探しが始まった。そんなある日、洋は思い詰めたようにちひろに胸の内を打ち明けた。

「僕らには子どももいないし、お袋もいないから皐月（さつき）姉に孝行したい」と。

突然の事にちひろはびっくりした。「カー付き、家付き、ババ抜き」という言葉さえある時代だ。しかも、夫の母親でなく、未婚の小姑である。しかし、洋だけでなく、ちひろにも皐月姉に対しては特別の思いがあった。

洋の父親は肺結核で末子の洋が八歳の時に亡くなったそうだ。当時の肺結核は人々に嫌われ、恐れられていたから、家の前を通る人は鼻をつまんで通ったと聞いた。洋の母はそれを悔しがって、家屋敷の処分を親戚に任せて、息子達を連れて郷里を離れた。その事が洋の母の新たな苦労の始まりとなった。処分を任された親戚の者が、処分した金銭を着服し、母親に渡されることはなかったそうだ。そして当時すでに結婚して家を構えていた大牟田の長兄や小倉の薫子（かおるこ）姉の所に母子は身を寄せたのだ。その間、経済的にいつも援助してきたのは、看護婦をしていた皐月姉だったと聞いている。そればかりか、卓次兄が肺結核で長期療養をした間も経済的な支援をしたのはこの姉だった。何よりも、洋のすぐ上の有三兄が、重い罪を犯し、長い刑務所生活を送った間も、一切の面倒を見たのは皐月姉だった。国立病院の婦長になってからも、生活費を切り詰めるために家も持たず、若い看護婦達と一緒につつましく寮住まいを通した。結局、皐月姉は独身を通した。しかし、姉は決して自分が家族の犠牲になった

とは言わない。自分の思い通りに生きてきただけだと言う。その言葉が単なる負け惜しみでないことをちひろは知った。

結婚して数年後、ちひろが夫とともに皐月姉を訪ねた時の事。その頃には、いつ有三兄が出所しても迎えられるようにと、皐月姉は家を構えていた。当時、長兄の賢一は大牟田の市議会議員だった。身元引受人には打って付けだと、ちひろは思ったのだが、姉は自分が弟を迎えられるようにと家を構えたのである。

洋とちひろが訪れた姉の家の仏壇には、皐月姉の願いが次のように認(したため)められていた。

一、有三が無事に出所できますように。

一、洋夫婦が信仰の上で成長しますように。

ちひろは衝撃を受けた。姉の願いは弟たちの事ばかり！　しかも、これは姉の祈りと言うより、親の祈りではないか！

「お姉さん、どうして自分のことを何も書いてないの？」

「何で自分の事を祈る必要があるとね？」

思い掛けない返事が返ってきた。ちひろは、この際にと、心に懸かっていた事を尋ねた。

「お姉さん、有三兄さんのこと、人に打ち明けてもいいの？」

姉は一瞬呆れたという顔をして、厳しい口調になった。

「あんたは一番肝心なことを隠して信心しんしゃっとばいね」

「でも、自分の事ならともかく、主人のことだもの……」

言い訳が空しいのは、自分が間違っているからなのだろうか？　信仰とは自分の思慮を遥かに超えたものなのかも知れないと、ちひろは感じた。皐月姉は女傑だなとも思った。

そんな義姉だったから、喜んで皐月姉を迎えたいと、ちひろは早速博多にお願いの電話を入れた。

「主人が姉さん孝行をしたいと言っています。私たち、家を持ちたいと探しているところなの。こちらに来て、一緒に住んではいただけませんか？」

口説き落とせるまで、何度でもお願いするつもりだったが、何と「行くよ」との返事だった。会社から帰宅した洋に姉の返事を伝えたのだが、洋は信じら

れない。
「姉さんが九州を離れられるはずがないよ」
自分で電話をして、皐月姉が本当に来てくれると分った時には、洋が嬉しくて男泣きしたことをちひろは今も忘れることができない。

二人にとって俄然、家探しは楽しくなった。姉の参考になるようにと、カメラを提げ、姉の目線を考えながら、シャッターを切った。一軒毎に小さなアルバムに収め姉に送った。姉はメグと名付けたシェパードの雑種犬を飼っていたので、庭がある事が第一条件だった。
松戸市近辺は勿論、柏市、鎌ヶ谷辺りも探したが、十分な広さの庭がある家は見つからなかった。そんな時、某建設業者が茨城の物件を勧めた。洋とちひろは、業者に付き添われ現地を見に行った。取手市を過ぎ、目的地に向かう道路の両側には、見渡す限りの青田が広がっていた。木々に囲まれた屋敷が数軒ずつ固まって田園の中に点在し、穀倉地帯の農家の豊かさを感じさせた。小貝川に差し掛かり、橋を渡った時、私にも故郷ができたと、ちひろの胸が躍った。筑波山を遠くに望み、ふるさとの山、ふるさとの川という言葉が過ぎった。緑の川原は、メグが喜んで走り回る姿を彷彿とさせた。
目当ての造成地は、小貝川から十分ほど車を走らせた小さな町の一角にあった。九区画の造成地の前には五メートルの舗装道路ができており、辺りの家々には庭木が植わり、住まいを大切にして生活している風情が感じられた。洋と相談して主要道路から二軒目の土地を選んだ。「九州の姉と同居するので、姉に見に来てもらい、気に入ったら即購入」と話しが決まった。すぐに飛行機で土地を見に来た皐月姉も気に入った。

夫婦で額を寄せ合って、設計に取り掛かった。家探しをしていた頃、二階に対面キッチンと浴室があった家が、ちひろにはとりわけ魅力的だったことから、その家を参考にした。一階には仏間と姉の居間と姉の小さなアトリエ、二階はちひろ夫婦のスペースだが、居間と対面キッチン、書斎と寝室。トイレ、洗面所だけでなく、浴室も一階と二階につけ、一階には姉用のミニキッチンも備え

た。姉が喜ぶだろうと、わくわくして家の完成を待った。
三月初旬に引っ越しと決まった矢先の一月十七日、関西を大震災が襲った。洋夫婦は八年前まで関西にいたのだ。次々に電話したが、幸い友人・知人には死傷者はなく、安否が確認できほっとした。しかし、自分たちが家を新築中であることは伝える事ができなかった。
三月三日が引っ越し当日だったが、皐月姉は一週間ほど遅れて、新居に入った。姉は九州で油絵を習っていたので、作品が沢山あった。玄関から廊下、階段と画廊よろしく姉の絵を掛けた。表札用の飾り板には、「下田&メグ」とペイントした。郵便受けまで御影石の飛び石を置いたり、庭木や花を植えたり、毎日が忙しく暮れていった。姉はいくつかの草花や花木の鉢も博多の家から持ってきていた。その一つにゆすら梅の若木があった。
「これは実生ばい。これで二、三年になると。桜んごとある小さな花が咲くとよ。六月には、柄のないサクランボんごとある小さな赤い実をつけると」

夫は通勤距離が長くなり六時に起床、ちひろの手作りの弁当を持って六時半には家を出た。この辺りは東京勤務の人は多く、五時前に家を出る人も少なくなかった。洋を送った後、姉と一緒に朝のお勤めをした後、二階の居間で朝ドラを見ながら食事を取り、九時には後片付けも済み、仕事に掛かった。夫の会社が本社を関西から東京に移したのを機に、ちひろは翻訳の仕事に携わるようになっていた。関西では私立の高校に非常勤講師として働きながら、ボランティア活動として通訳や翻訳に携っていた。姉と一緒なので昼食も抜くことなく、夕食は洋の帰りを待って少々遅くなるが、姉と洋はビールを飲み交わしながら、話が弾んだ。
同居を始めて間もないある日、姉が言った。
「不思議かねぇ、福岡にいる時は朝の四時前から咳が出て、しばらくは止まらんかったばってん、こちらに来てから咳がいっちょん出んごとなったばい」
弟夫婦のところに来て、一人暮らしの間持っていた不安感がなくなったせいだろうか、と姉は喜んでいた。姉は町が主催する絵画教室、俳句教室、水墨画教室に席を置き、活発に活動を始めた。

近所の子供たちが、よく「メグちゃんいる？」と訪ねてきた。子ども達には決して吼えず、「無駄吠えをしない犬だ」と姉は自慢していた。姉のメグに対する愛情は、愛犬というより、子どもか恋人のようだった。

夫とちひろは所用があり、姉とメグを残して浦和に住むちひろの弟宅に一泊したことがあった。帰宅すると、何とメグが姉の部屋の中にいた。淋しかったから入れたとのことだった。九州では姉はメグを子犬の頃から室内で飼っていたが、茨城に行ったら新居でもあるし、外で飼う事を決心して当地に来たのだったが…。

「内緒よ」と言い含められて、メグは置物のように小さなマットの上に腹ばいになっていた。驚いたちひろの顔を上目使いで見た後、目を伏せて動かなかった。しばらくすると立ちあがり、背伸びをし、向きを変え、また坐り込んだ。家の中にいる間中、メグはその小さなマットから出ないのである。しかし、身震いすれば毛は散るし、犬の体臭は鼻の敏感なちひろにはどうにも耐え難かった。

「お姉さん、メグを仏間の濡れ縁から入れないで」

ちひろは室内に粗い犬の毛を見つけると、鼻がひくひくしてくるのだ。眼もかゆくなった。犬の毛はちひろにとってはアレルギー源だった。

メグを室内に入れて、四日目の夜から姉の喘息が始まった。

「お姉さん、メグを外に出して！　絶対にメグのせいよ、お姉さんが喘息になったのは」

姉はメグのせいではないと主張したが、ちひろにはそれしか原因は思い当たらなかった。

ちひろにとっての最大の誤算は、新居に越してきてわずか一年半で、洋が四国に単身赴任になった事だ。夫の一人暮らしは心配だったが、ちひろは毎月飛行機で飛び、数日間身の回りの世話をしてトンボ帰りをした。茨城の新居に残された二人にとって、洋のいない生活は色褪せて見えた。姉の喘息はますます酷(ひど)くなった。ちひろにとって、気兼ねなく夜中まで、いや朝までででも仕事に没頭

できる事だけは有り難かったが…。
姉はある時こう言った。
「私が嫁の世話になるなんて思いもよらんかったばい。旦那の姉さんだから、威張っておれると思ったばってん……」
水くさいな、夫がいなくても旦那の姉さんには変わりないのに。威張っていてくれていいのに。

洋の単身赴任から一年半後、皐月姉は九大看護学科の同窓会のため福岡に帰った。何とメグを飛行機に乗せて。ちひろにメグの世話を任せられなかったのも姉には無理からぬ事
だった。普段は従順なメグだが、まだやんちゃな一歳犬でもあり、散歩の際に猫の姿を見つけた時などは、猛烈な勢いで追いかけ、ちひろを引き倒して逃げたことも一度や二度ではなかったからだ。
姉は自分が勤めていた国立病院を訪れ、かねがね信頼を寄せていた関谷先生の診断を仰いだ。姉の肺機能は正常な人の六十％程しかなく、よくぞ婦長が務まっていたと、関谷先生は驚いておられたそうだ。
「強化治療をやりましょう」
姉は、一も二もなく、「お願いします」と返事をし、治療を受け始めた。やがて、治療に専念するために、茨城に戻って福岡に住所を戻す手続きをした。わずか三年半で福岡に戻ってしまったのである。

ちひろは一人になった。一人には広すぎる家だった。挫折を知らなかったちひろだが、初めて落ち込んだ。何カ月も経って、はっと気付いた。姉の喘息の原因は、メグの毛ではなく、ちひろの犬の毛と臭いに対する過剰反応だったのではないだろうか。繊細な姉には、大きなストレスになったに違いない。
「姉さん、ごめんね。私、知らぬ事とは言え、もうちょっとでお姉さんを殺していたかも知れない……」
電話口の姉は、はゝゝと笑って、
「実を言うと、段々しんどくなって、このままでは、命が持たんばいと思うて

九州に戻ったと。しんどいところは人に見せたくはなかったとよ」
「でも、お姉さん、私達、姉妹よ」
「姉妹でも、しんどいところを見られたくはなか。有三たちに対しても、同じたい。有三の所ば出て、病院の近くにこの家を借りたと」
そういう事だったのか、姉が一人住まいを選んだのは。
「でも、お姉さん。誰にも甘えられないなんて、淋しい」
「これはどうにもならんと。誰にも頼らず一人で生きてきて、沁みついた性分たい」
「そんなの……、悲しい性分ね」
「仕方なか。それが私の性分たい」

ちひろは一人になって、仕事は思う存分できた。夫のところにも長く滞在した。洋は家のことが何もできない程に仕事が忙しくなり、男やもめに何とやらである。掃除も洗濯も大仕事だったが、ちひろは徳島の社宅でも仕事ができるよう、パソコンを購入し、インターネットも接続した。

九州に戻った姉は強化治療を受け、小康を取り戻しつつあった。
「お姉さんが戻って来てくださるのを待ってます」
「それはあり得んばい」
「どうして？」
「この先生から離れられんばい」
皐月姉が頼る関谷先生は、喘息では、西日本で三本の指に入る程の先生だと、姉は全幅の信頼を置いていた。
「でも、お姉さん、茨城にご自分の家があることは忘れないでね」

平成十三年六月に洋は六十歳になり、定年退職の予定だったが、会社の方から後一年残って欲しいとの声がかかった。その年から年金支給が一年遅れることになった事もあり、洋は有り難く一年の延長を受諾した。翌十四年六月、単身赴任を終えた洋は、六年ぶりに我が家に戻ってきた。洋も皐月姉に茨城に戻

るよう頼んでみたが、返事は同じだった。

皐月姉が福岡に戻り九年近くが過ぎ、平成二十二年、姉は入退院を繰り返すようになった。その年の秋、姉から電話があった。

「来年一杯は持たんごとある。話して置きたか事のあると。都合の良い時に来(き)んしゃい」

そう言われて、ちひろは飛び上がった。そして、洋とちひろは慌てて九州行きを計画したのだった。

十二月四日、福岡まで飛んで、皐月姉に会いに行った。それまで姉は肺炎で病院に入院していたが、小康を取り戻しており、弟夫婦が来るからと、外泊許可を貰っていた。洋夫婦が着いた時には、姉はすでに家に帰っていた。

「二日程前から、手足が腫(は)れて立てんごと痛んでたばってん、今日は良か」

姉は布団の上に起きており、そう言って洋たちを迎えた。顔の皺は深くなってはいたが、ふっくらして思ったより元気そうだった。ちひろが以前撮ったメグの写真が大きく引き伸ばされてテレビの上に飾られていた。メグが老衰のため死んでもう三年になる。一瞬、〈姉の所には三年振りになるのか？　いや、そんなはずはないのに〉と思った。〈そうだ、この前会ったのは賢一兄のお葬式だったから、こちらには寄らなかったのだ〉と思い出した。

皐月姉は何と自分の葬式のことを事細かに、洋夫婦に説明した。積立が満期になっていること。その証書には、祭壇の見積りまでが添えられていた。さらに姉は、几帳面な字で書き込まれた住所録を見せた。そのビニールカバーには、「洋様、ちひろ様」と書いた紙がはさんであり、年賀状を毎年出している人達の名簿だった。通夜にも、葬式にも来なかった人には、三カ月程経ったら、死亡通知を出して欲しいと、見本までが添えてあった。

さらに、姉は郵貯と銀行の通帳とそれぞれの印鑑を見せ、何が振り込まれ、何が落とされるかを説明した。

その上、亡くなった後に連絡・手続きをすべき公共機関等が一覧表になっていた。事務所の所在や電話番号までが添えられていた。余りの周到さにちひろは、ただただ驚くばかりだった。

「お姉さん、確かに承知しましたから、安心して長生きしてくださいね」
「うん、これですっきりしたばい」
次に、平素お世話になっている友人の大串さん宅に挨拶に行くようにと、地図が用意されていた。誰と誰に挨拶に行くと聞いていたので、手土産は用意していた。向かいの高尾さんのお母さんやお世話になっている関谷先生のお宅にはタクシーで、パジャマ姿にガウンを羽織った姉と一緒に回った。
その晩は、高尾さんのお母さんの紹介で津屋崎の民宿に泊まった。洋夫婦は、二年に一度は皐月姉を見舞ってきたが、家は狭いし布団の準備もできないからと、いつもは小倉の薫子姉の所に泊っていた。しかし、この時は、皐月姉が津屋崎出身の高尾さんのお母さんに宿を頼んでくれていた。その民宿は、姉の所からタクシーで二十分ほどの距離にある海水浴場にあった。着いたのは夕方で、夕日に海が黄金色に染まっていた。その夕暮れの美しさが何故か悲しく、姉の人生に重なってならなかった。
翌日、洋夫婦は皐月姉を病院まで送った後、後ろ髪引かれる思いで茨城に戻った。

しばらくして皐月姉から、「大事なことは全て伝えたよって荷が軽うなった。これなら後五年は生きられるごとあるばいと思うて、新しく五年日記を買ったとよ」と聞かされた時には、ちひろは飛び上がらんばかりに喜んだ。姉の手足の腫れと痛みは、リューマチ性多発性筋痛症とのことだった。この病気はリューマチではないが、症状が似ているのでこう呼ばれているそうだ。皐月姉がいつも電話で病状を詳しく話してくれていたので、ちひろは前年の夏頃からノートを作りメモを取っていた。
翌平成二十三年の賀状には「後五、六年は頑張ります」とあり、今度は五年から六年に延びたと、ちひろは大喜びした。
さらに嬉しいことに、洋たちが皐月姉を見舞った直後、市内に住みながら仲違いして四年ほど全く音信不通だった有三兄が、病院に駆けつけて病室で土下座をして皐月姉に謝ったのだ。小倉の正夫義兄(あに)から皐月姉の病状を知らされ、「見舞わねば後悔するぞ」と説得されたのだ。

「俺は皐月姉に勘当されたとばい、姉でも弟でもなか」
有三兄は最初そう言い張ったらしい。
「あの皐月さんがそう言うなんてよほどのことじゃないか！　君に反省しなくてはならん所があるんじゃないのかね」
正夫義兄（あに）の言葉は重かった。有三兄の事件後の日々を、歯をくいしばって乗り越えたであろう薫子姉は、数年後娘たちの勧めもあり、この正夫義兄（あに）と新たな人生を歩んできたのだ。
和解して以来、有三兄は頻繁に姉を見舞い、毎日のように電話で安否を確認し、茨城の洋夫婦に連絡をくれるようになっていた。
ところが、同二十三年一月半ば、皐月姉は腰をひねって、どうやら脆（もろ）くなっていた腰椎を痛めたらしい。そのうえに室内で転び、したたか顔をストーブに打ちつけた。体の自由が利かなくなり、トイレが間に合わなくなった。介護認定のためにケアマネージャーの訪問を受け、要支援との認定を受けたばかりだ。まだ認定手続きが完了しないうちに、要介護状態になった。市内に住む有三兄夫婦は頻繁に皐月姉を見舞った。洋たちは遠すぎた。ちひろは、茨城に家を建てたのは間違いだったか、と悩みもした。
姉の姿を見るに忍びなくなった有三兄は、自分が世話になっている保護司の大久保先生に助けを求めた。大久保先生は、皐月姉と同じ町内に住み、社会福祉協議会の役員をされている事もあり、姉の介護認定の見直しについて相談に乗って貰い、ヘルパーの紹介をもお願いしていると、有三兄から報告があった。姉の友人の大串さんが、毎朝姉のところにおかゆなどを携え、顔を出してくれていた。灯油をストーブに入れたり、洗濯物まで持ち帰ってくれていると聞いた。何と有り難いことか。遠くの姉妹は、いざという時には、間に合わないものだ。
一月二十八日、皐月姉に電話を入れると、姉は風邪を引いてかすれ声だった。
「痰出しに時間がかかって、いっちょん眠る時間がないと」
「辛いねぇ。でも頑張ってね」
「うん、頑張るばい」
そんな会話を交わしてわずか五日後である。平成二十三年二月二日、洋とち

ひろは取る物も取りあえず羽田空港に向かった。昼前に、皐月姉が亡くなったと向かいの高尾さんから連絡を受けたからである。その日から入る予定になっていたヘルパーさんが訪れ、姉が亡くなっているのを発見したのだという。すぐに救急と警察が呼ばれたが、すでに硬直しており二時間程前に亡くなったと思われるとの事。

半信半疑のまま、ちひろは博多市内に住む有三兄宅、小倉の薫子姉宅、小郡の卓次兄は入院中だったが不二子義姉(あね)に連絡を入れた後、慌ただしく羽田空港に向かい、夫とともに機中の人となったのだ。

福岡空港には、小倉の正夫義兄(あに)の運転で、有三兄が迎えに来てくれていた。

「お兄さん、間に合って良かったですね！」

四年ぶりに会う有三兄の顔を見たとたん、ちひろの口から真っ先に出た言葉だった。普通は死に目に会えた時に使う言葉だが、それ以上に深い思いがあった。

「それも、正夫義兄(にい)さんのお陰です」

有三兄が皐月姉と絶交状態になったと姉から聞かされた時、「私たちが間に入って、皐月姉さんと有三兄さんの思いを伝える橋渡しをしようね」と洋夫婦は話し合った。ところが、その矢先、有三兄からの絶縁状が届いたのだった。

「これ以上、君たちには迷惑を掛けられないので、縁を切りたい。電話も、手紙も無用に願います」

手紙通り、電話も通じなくなっていた。唯一、正夫義兄にだけは、酒を飲んだ勢いでたまに電話していることが判って以来、一縷の望みをかけてきた。願い通り有三兄は皐月姉の許に戻ってきた。二カ月足らずであっても姉にはどれほど嬉しい日々であっただろう。

ネオンの美しい夜の博多の街を通り、姉の小さな借家に着いた。

皐月姉の遺体は、検体から戻っていた。小倉の薫子姉、小郡の不二子義姉(あね)、有三の妻ヤエ子義姉(あね)の三人が見守っていた。何とも安らかな表情で、眠っている人のようだった。目覚めたら、「何で皆、集まっとうと?」とでも言い出しそ

うだった。検体の医師は、姉は九十歳くらいの体だったと言ったそうだ。死因は老衰と判断された。喘息の薬は、骨を脆(もろ)くする。この九年間に、腰椎、胸椎がやられて、手術を二回受けていた。人生と戦い、病と闘ってきた姉だ。でも何と安らかな顔か。「もう、生き切ったばい」と言っているかの様だった。享年八十三歳だった。

間もなく、葬儀屋が来て、遺体を典礼会館に運ぶというので、有三兄と洋夫婦が付き添い、薫子姉夫婦と不二子義姉(あね)は有三兄が急遽予約したホテルに向かった。会館では、姉の遺体が寝かされた隣室で深夜まで、通夜・告別式の打ち合わせが行われた。

翌日、遺体を棺に納める前に湯潅が行われた。係の一人が、姉の髪をシャンプーした。その席に居合わせた友人の大串さんが、「下田さんは『髪も洗えとらん』と気にしんしゃっとったばってん、これで『すっきりしたばい』と喜んでおらっしゃるでしょう」と、博多弁でちひろに語りかけた。

姉は気持ちよさそうにシャンプーされて、首が柔らかく動き、遺体であることが信じられない程だった。体も清められ、旅立ちの白い着物を着て、薄化粧を施された姉は実に安らかな顔だったが、いつもの凛とした雰囲気が漂っていた。

通夜、告別式を無事に済ませ、火葬場でお骨拾いまでの時間を待合室で過ごしていた時、それまで気丈に振る舞っていた薫子姉が、わぁ―と号泣し始めた。

「皐月姉さんは、苦しまずに亡くなったのだから…」

ちひろの声を遮(さえぎ)るように、薫子姉は叫んだ。

「泣かせて！」

薫子姉の思いを察すると、ちひろも悲しみがこみ上げた。薫子姉にとっては、七歳も年下の皐月姉が先に逝くなんてどんなに辛いことだろうか。なにより、薫子姉は現在、夫も娘も孫もいて曾孫にさえ恵まれている。結婚することもなく、家族のために尽くしてきた妹が一人淋しく死を迎えたなんて耐えがたかったのだ。号泣する薫子姉の背中を、卓次兄の娘妙子さんが優しくいつまでも擦

っていた。妙子さんは入院中の父親に代わり、母親の不二子義姉(あね)とともに、夫婦で葬儀に参列していた。

やがて骨揚げも滞(とどこお)りなく終え、洋とちひろは姉の遺骨を抱いて、皆と一緒に姉が住んでいた借家に戻った。葬儀社が整えてくれた祭壇に遺骨を安置した後、兄姉達は、それぞれ小倉と市内の我が家に戻り、不二子義姉(あね)は娘夫婦に付き添われて小郡へ帰って行った。

後始末のため、数日間姉の家に残った洋が、大串さん宅にお礼に伺った時のこと、皐月姉がどんなに弟たちのことを思っていたかを大串さんから聞いた。

亡くなる数日前に、大串さんが姉を訪ねた時、姉は布団の上に体を起こし、俯(うつむ)いて考え込んでいて、大串さんが玄関で声を掛けたのも、部屋に入ったのも気付かなかったそうだ。

「下田さん、どうしたと？」

姉は大串さんに声を掛けられて、我に返った。

「今年九十歳になる薫子姉も、八十歳の卓次も、七十四歳の有三も皆死んでしまったら、姉兄たちを亡くした洋は一人になって、どげんすっとやろか…やっていけるとやろか…、昔肺結核を患った気難しい卓次は、不二子さんを大切にして行けるとやろか…、自分の子どもば持ったことのない有三は、ヤエ子さんの娘たちや孫たちへの思いを理解してあげることができるとやろか…」等と考え込んでいたと言うのだ。その話を大串さんから聞いた洋は、茨城に戻った時泣きながら、ちひろに語って聞かせた。

自分の命が消えようとしているのに、いや、消えようとしているからこそ、弟達の行く末を案じた皐月姉。いかにもお姉さんらしいと、ちひろも泣けてきた。思い返せば、有三兄が出所した時も、姉は弟に厳しかった。

「あんたは罪を償ったと思っとうばってんが、本当の償いはこれからたい」

有三兄が出所後の厳しい人生を生き抜けたのも姉の厳愛があったからだ。有三兄は常々「皐月姉は親であり、厳しか師匠たい」と言っていた。それなのに、売り言葉に買い言葉で、絶交した時期があったことを有三兄は悔やんだ。

「俺が、姉の命を縮めてしもうた」と。

皐月姉との別れから一カ月余りが過ぎた三月十一日、千年に一度とも言われる東日本大震災が、東北を直撃した。茨城県南部も被害を受けた。大きな余震も頻繁だ。ちひろはその怖さに、〈姉がいなくて良かった。繊細な姉に、こんな怖さを味合わさないですんだ〉としみじみ思った。

震災の後片付けに追われていたちひろに、大きな余震がテレビで報道される度に有三兄は心配して電話をくれた。皐月姉の家の片付けを兄は心を込めて行い、大屋に無事に引き渡した。遺骨も自分の家に安置し、毎日の回向を欠かさずに行い、天ケ瀬の墓園に納骨するまで気丈に振る舞っていた。しかし納骨を済ませて半月程経った頃から言いようのない虚無感に苛まれ始めたようだ。喪失感が有三兄を飲み込もうとしていた。

ちひろは、姉の命を縮めたと苦しむ有三兄の気持ちが痛いほど解った。それだけではない、痛ましいことに、兄には、親や兄弟姉妹に散々迷惑を掛けたという自責の念が何十年も経った今も消えない。

それは、昭和三十九年の事件。その年は、洋が、同級生より四年遅れて、独学で大学に合格した年だ。その合格発表を待つ日々の間にあの事件は起こった。ずっと後で、洋から聞いた話だが、看護婦をしていた薫子姉は、あの晩、遅番勤務で帰宅が遅くなり人通りの少ない道を急ぎ足で自宅に向かっていた。家のすぐ近くの両側が生垣になる所まできたところで、今でいうストーカーに襲われた。突然背後から口をふさがれ、暗い生垣の陰に引きずり込まれようとした。たまたま姉宅を訪れようと夜道を急いでいた有三兄がその瞬間を目撃した。有三兄は、駆け寄り、相手の腕を掴んで引き離したが、無言の取っ組み合いとなった。相手は中年の屈強な男で、身の危険を感じた有三兄は、近くにあった石を掴み、その男の頭を思い切り打ちつけたのだという。洋は詳しくは語らなかったが、非常な事態となって、薫子姉は一刻も早くと家まで駆けていき、救急車を呼んだ。薫子姉は救急箱を抱えて走り戻ってきた。しかし、救急車のサイレンが遠くから聞こえると、有三兄は突然言いようのない恐怖に襲われ、うす暗がりの中で何とか応急処置を施そうとしている薫子姉を後にして、その場から逃げ去ったのだ。しかし、夜が明けると我に返り覚悟を決めて、近くの交番

に出頭した。その男性は救急車の中で死亡したと知らされた。有三兄は殺人を犯してしまったのだ。どんな理由であれ、尊い生命を他人が奪う権利はない。「事故」で済む事ではなかった。どんなに悔いても、取り返しのつかない犯罪となった。その男性が、家族もなく、両親も亡くなって一人身だったことだけが救いだった。　その後有三兄は、小倉の拘置所送りになった。

面会に行った洋に、有三兄は開口一番こう言った。

「ちひろ君との事、申し訳ない！」

有三兄は、苦学の末にやっと大学に合格した弟が、自分の所為で将来の就職が厳しくなり、ちひろとの交際も当然破たんするだろうと胸を痛めたようだ。

悲しいことに、過ちは犯した後から、その大きさ、重さが圧し掛かる。薫子姉は自分を護るためとはいえ、有三が人をあやめてしまったことに胸を痛め、犯罪者の姉という汚名を着ることとなったが、薫子姉は挫けなかった。娘たちもけなげに耐えて乗り越えた。

ちひろは、有三兄に何としても元気を取り戻してほしかった。皐月姉がいない今、それはちひろに託されているように思えてならなかった。

「お兄さん、何十年も昔のことよ。兄弟姉妹に迷惑かけたなどと、もう言わないで！

お互いに元気で、頑張っていることだけで、みんな嬉しいのよ。卓次兄さんのようにたとえ病気でも、頑張ってくれていることがうれしいし、励まされるの。有三兄さんだってずっと頑張ってこられたではありませんか。それに、皆、それぞれにいろんなことを乗り越えて人生を生きてきている。お兄さんのことも、いろんな事の一つなの。それも含めて兄弟姉妹それぞれが、自分の人生だと思っているわ。宿命って、自分の命に宿っているから、ある意味では、お兄さんの所為じゃないわ。自分の宿命よ。それに、運命って、命が運ぶものなのね。その人の命の在り方が、人生を決めるのね。私、自分の命に宿っているマイナスの何かを変えることができたと感謝しているの。私、変わったもの。皐月姉さんの勧めで信仰できたこと、本当に感謝しています。皐月姉さんは有三兄さんにも信仰して欲しいと願っていらしたわね」

「今は真剣に朝晩回向しとるばい。それしか姉に応える道は無かって思っとるよ」

「お兄さんの真剣なお勤めの姿を見てそれを感じたわ。皐月姉さんは、今頃喜んでいるはずよ。それに、お兄さんと絶交している間、お姉さんそれは淋しそうだったわ。お兄さんが戻ってらして、頑張ってきたお兄さんの姿を見て、お姉さんはどんなにほっとなさったか…。

お姉さんは、お兄さんと音信不通になる前だけれど、常々言っていましたよ。『有三が下田家の宿業をば一人背負ってくれたと』って。『ばってん、今は有三が一番幸せたいね。ヤエ子さんの娘や孫たちから爺ちゃんと呼ばれて、いい家庭を作っとる』って。『一番苦しんだ者が一番幸せにならんといけんとばい。それが信心たい』って」

ちひろの切なる願いが届いたのだろうか。有三兄は、「心が少し軽くなったよ」と。

そして、わずかずつではあったが、元気を取り戻し始めた。さらに、爺ちゃんと甘える孫の詩織ちゃんがエネルギーを与えてくれているようだ。有三兄が皐月姉に詫びを入れに病院に駆け付けたのも、この詩織ちゃんの後押しがあったことを知った。小学高学年になっても休みには爺ちゃん宅にバスに乗って泊りに来ていた彼女は、兄にこうせがんだそうだ。

「爺ちゃん、仲直りしてよ。皐月婆ちゃんに病院前で出会った時なんか、詩織、何て挨拶したらいいか分からんとよ」

これも、ヤエ子義姉さんから聞いたことだが、詩織ちゃんは、いつも言っていたそうだ。

「婆ちゃん、爺ちゃんが行かんとなら、婆ちゃんが行ってあげてよ。皐月婆ちゃん、杖ば突いとんなしゃったよ」

ヤエ子義姉は、「行くことならん」と言われていたのだろう。禁が解けてどんなにほっとなさったことだろうか。皐月姉の最後の正月には、ヤエ子義姉と大串さんから姉におせち料理が届けられたそうだ。

まもなく、有三兄は洋たちに明るい声で電話してきた。

「保護司の大久保先生が『今年は一緒に星野家の菩提寺にお参りさせてください』と言ってくださってね、一緒にお参りしてきたよ」

あゝ、犠牲になられた方は、星野さんっておっしゃるのか—と思いつつ有三兄の話を聞いた。兄は出所後、毎年のお参りを欠かしたことがないそうで、「ご住職から『こんなに長くお参りに来てくださる方はいないですよ』って言われたよ」と。今回で、ちょうど三十回目になるそうだ。

三十年！　いや事件からは四十八年。ほぼ半世紀である。その歳月の長さに兄の自責の深さを垣間見て、涙ぐみそうになった。他人を傷つけることは自分を傷つけることだと言うが、まさにその通りなのだ…。自業自得と言われればそれまでだが、生涯癒えることのない、どれだけ深い傷を負ったであろう。三十年前の姉の言葉、「本当の償いはこれからたい」の意味の一端が分かったように思った。墓参を果たし通した有三兄は、命が少し軽くなったのかも知れない。

有三兄が元気を取り戻すにつけても、思い出されるのは、皐月姉との電話での会話。

「有三は、苦労しちょらんけんねぇ……」

物思いに沈んだ皐月姉の声の重さに、ちひろは耳を疑った。

「でも、兄さんは人間扱いされない所で、人一倍辛い思いをしてきたのでは……」

「そういう苦労はしたばってん、有三は金の苦労は知らん。私が何とかするぐらいに考えとる。もう金は無かばい」

ちひろは、有三兄が出所して数年後、仕事上どうしても自分のトラックが欲しいとせがんで、姉が工面し購入したことは聞いていたが、多くを語らない姉だけにその後の事は殆んど知らなかった。以前、洋とちひろが訪ねた有三兄の家は、手料理の上手い、温かなヤエ子義姉さん、上手に描けた絵を得意そうに兄に見せていたヤエ子義姉さんの孫娘詩織ちゃん—微笑ましい家族団欒がそこにはあって、問題があるなんて想像もしなかった。いつも優しい兄夫婦だった。それに弟夫婦には良い所ばかり見せたかったのだろうか。

「私が先に死んだら有三はどうするとやろう……」

しかし、弟を思う姉の苦悩はどこまでも深かった。弟に自立する覚悟を持たせるために、皐月姉はあえて「私を頼るな」、「勘当する」と言う言葉を口にしたのだろうか？　それを有三兄は、文字通りに受け取ってしまったのだろうか？　姉には苦渋の決断だったにちがいないのに、姉はいちいち詳しくは語らない女性(ひと)だから。

ある時、姉はぽつりと漏らした。

「私の一生は一体何(なん)だったんやろうか？」

ちひろが励ます余地もなく、底なしに深い泥沼のような絶望感だった。そんな弱音を吐いたことがただ一度あったが、いつも、凛としていた皐月姉だった。弟の無事を陰ながら願い続けていたに違いない。心配かける子どもほど可愛いいと言う、母の心で。

有三兄が詫びて戻ってきてから、姉の空虚さは消えた。四年もの間、夫婦で頑張りきった弟を見て、どんなに安堵したことだろう。有三兄には必要な四年間だったのだ。

そして、今では朗々たる有三兄の回向の題目が皐月姉の許に届いていることだろう。

同居していた頃、ちひろは姉に尋ねたことがあった。

「姉さんは、結婚されてないから、子どもを持ったことがないのに、弟達にどうして親のような愛情を持てるの？」

「お袋さんが姿で教えてくれたと」

心から母親を慕い尊敬していた皐月姉は、母親がこうしたいと思うことを察して、親に代わって行ってきたのだ。卓次兄の治療代しかり、有三兄のための一切合切。そして母親が亡くなった後は、ますます母の心を引き継いだ。

ちひろは、自分たちの結婚を見ることもなく亡くなった夫の母親のことを、皐月姉からもっと教えてもらいたかった。その事は心残りだが、皐月姉は有三兄や洋夫婦の心に今も生きている。皐月姉の弟たちに対する思い遣りこそ、無償の愛だったと、ゆすら梅を見つめながら涙ぐむ。

姉が引っ越しの時、九州から実生の苗を持って来て、庭に植えてくれたゆす

ら梅だ。三本の樹が、寄り合うように育った。それぞれ幹も太くなり、ゆすら梅独特のささくれだった樹皮が古木の風合いを醸し出している。今年も、早春には、小さな、桜に似た薄桃色の花をこぼれんばかりに咲かせた。そして今、小さな真っ赤な実が、濃い緑の葉影から顔を覗(のぞ)かせている。「今年は珍しく、熟した赤い実が、沢山残ってるなぁ。奥にあるから、外からは見えづらいのかな」と洋は言う。例年なら、実が真っ赤に色づくと、あっと言う間に、小鳥に一つ残らず食べられてしまい、辺りには種ばかりが散らばっているのだ。けれど今、葉影に残る実のその赤さが、ちひろには泣けと如くに見えるのは、気のせいだろうか。しかし、ちひろの涙は悲しみのそれではなく、皐月姉への尽きせぬ感謝の涙だった。

（完）

平成二十四年六月二十二日、古希を迎えて、